

チャレンジとやまヒストリー2021

とっておき埋文講座①



はじめに

「チャレンジとやまヒストリー2021」では、小学生の夏休みに合わせ、県内の小学4～6年生とその保護者を対象として「ワクワク体験教室」「こども考古学講座」「まいぶん研究室」を実施しました。



本事業は、埋蔵文化財に関する様々な体験活動を通して、考古学や文化財への関心を高めることを目的としています。また、子供たちが夏休みに取り組む自由研究の一助になっています。

ワクワク体験教室

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、昨年度より1回の組数を少なくし、開催日を多くしました。また、体験メニューも少なくしました。様々な制限がある中でしたが、応募数は昨年度を大きく上回りました。たいへんうれしい気持ちを抱いたと同時に、子供たちの期待に添えるような活動になるように精一杯努めようと決意しました。

大変心残りだったことは、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う休館により、23回目以降のコース（「古代のアジロ編み・漆塗りを体験しよう」の2日目、「ガラスのまが玉づくりを体験しよう」、「大型まが玉づくりを体験しよう」）が中止となったことです。楽しみにしていたであろう子供たちの残念そうな表情が目には浮かび、大変心苦しく感じました。

各教室の活動内容を紹介します。子供たちが生き生きと活動する姿が見られました。

○刀鍛冶の体験をしよう (ペーパーナイフ)



「鍛冶」とは、鉄を鍛錬して刀や鋏などの製品を作ることです。

七輪に木炭をくべて五寸釘を800℃近くまで熱します。赤く輝く釘に歓声があがりました。熱しては叩き、熱しては叩きを繰り返していくと、柄の部分、切っ先の部分が薄く平らになり、形が整っていきました。次に、形づくられた熱い釘を一気に水に入れて冷やします。この「焼き入れ」という作業を行うことで、強度を高めます。最後に、砥石で刃を研いで刃先を鋭くします。粗い砥石で大まかに研いだ後は、細かい砥石を使って仕上げ作業です。新聞紙を使ってペーパーナイフの試し切りをすると、切れ味のよさに驚きの声が上がりました。

○古代の鏡の鑄造を体験しよう (錫鏡)



「鑄造」とは、あらかじめ造られた型に溶かした金属を流して型と同じ物をつくる技法です。

鏡の原型は、射水市の上野遺跡から出土した弥生時代の鏡です。型枠の中

に、鏡を置いて鑄物砂を入れていきます。鑄物砂は、押し込むと砂が締まり、より固くなっていきます。全体重を乗せて押し込むため、子供たちにとってはかなりの力作業です。汗を流しながら、親子で協力して作業を進めました。そして、溶かした錫を鑄物砂でつくった型に流し込み、冷えて固まるまで待ちます。どのコースの鏡もうまく成形されており、子供たちは（我々職員も）安心した様子でした。固まった鏡の裏面を砥石や耐水ペーパーで磨き、仕上げます。ざらざらだった面に少しずつ光沢が出てきました。顔を映せるほどにはなりませんが、建物の壁に日光を反射させることができ、子供たちは大喜びでした。

○染物を体験しよう (藍染エコバッグ)



「染色」のうち、歴史的な技法である「藍染」について学び、エコバッグを染色しました。藍の色は「ジャパン・ブルー」と呼ばれ、日本を代表する色として世界中に知られています。

初めに、エコバッグにビー玉や洗濯ばさみ、輪ゴムなどを使って模様付けをします。次に、それを藍液に漬け込むと、模様付けしたところには染液が染み込まないために、白ぬきの模様が表れます。最後に、藍の青色が出なくなるまで、水で何度もすすぎます。すると、藍の鮮やかな色の中に白抜きのきれいな模様が浮かび上がりました。模様付けの仕方や藍液の揉み込み具合によって作品の風合いが変わるので、手作り感があふれる作品になりました。

○古代のアジロ編み・ 漆塗りを体験しよう (コースター)



「アジロ（網代）」とは、ツルやシダなどの植物、サクラやヒノキの木、樹皮などを細く裂いた素材で作った編み物です。

この活動では、植物素材の代わりにクラフトテープを使ってコースターを作りました。アジロ編みのパターンは、「1本超え、1本潜り、1本送り」と「2本超え、2本潜り、1本送り」に挑戦しました。初めに、縦に並べたテープに横から別の色のテープを差し入れ、縦のテープを超えたり潜ったりしながら編みます。慣れないうちはまちがうことも多く、やり直しをする子供もいました。編み終わると中心に詰めて編み目をそろえます。最後に、上下左右に余ったテープを折り返して編み込んだら完成です。そして、仕上げに漆塗りをすることで、頑丈で光沢のあるすてきなコースターができあがりました。これなら、結露して水滴がついたコップでも大丈夫です。きっと大活躍してくれることでしょう。

こども考古学講座



今年度からの新たな事業として、「こども考古学講座」を開講しました。講義では、「考古学」という学問について学んだ後、県内の埋蔵文化財や発掘調査について理解を深めました。館内見学では、初めて見る収蔵庫の広さに驚き、そこに保管されている遺物の数の多

さに圧倒された様子でした。出土品に触れる体験活動では、本物の土器や石器などのつくりや紋様、使い方等を理解し、実際に手に取って観察することで、先人のくらしや知恵について学びました。これまであまり馴染みのなかった「考古学」という学問に慣れ親しみ、興味・関心をもつことができました。

まいぶん研究室

当センターでは、毎年夏休みに来館する小学生やその家族を対象に「まいぶん研究室」を開設しています。今年度も、考古学への関心を高めるとともに、埋蔵文化財について理解を深められるようなコーナーを設置しました。各コーナーの内容を紹介します。

○「タッチ・ザ・DOKI」と 遺跡地図閲覧コーナー



市町村・校区别的遺跡地図とふれる標本箱「タッチ・ザ・DOKI」を置きました。自分が住んでいる市町村にある遺跡と、そこから出土している土器について自由に調べられるコーナーです。遺跡が身近にあり、土器が出土していることを知ることで、考古学への親近感がわくようにしました。また、興味をもった子供たちがすぐに調べられるように、関連の資料を掲示しました。

○ぐるっと回転！ 縄文土器のパラパラ動画を作ろう



パラパラ動画を作成するアプリを使った動画の作成方法を紹介しました。縄文土器を回転させながら写真を8枚撮影し、それを続けて流すことで、土器の形や紋様の変化の様子を把握しやすくなりました。アプリを活用して動画を作成するというのが、子供たちの知的好奇心をくすぐるきっかけになったことと思います。

○夏休みの自由研究 —縄文土器の接合に挑戦！—



2種類の縄文土器の土器パズルを用い、完成にかかった時間の違いを比べるとともに、その理由を考察できるようなワークシートを作成しました。それを夏休みの宿題に生かしてほしいというのがねらいです。ピース数はもちろんですが、土器の形の変化が大きかったり、紋様が複雑だったりすると早く組み立てられることに気付けるかどうかが鍵です。当センターの職員が実践した記入例を掲示し、参考にしてもらえようにしました。来館学習に訪れた小学6年生がとても意欲的に組み立てる姿が見られました。

終わりに

新型コロナウイルスが猛威をふるい、後半の体験活動が中止、「まいぶん研究室」も閉鎖となり、とても残念です。その一方で、今年度も多くの方々にご来館いただき、感謝の念に堪えません。また、ワクワク体験教室の参加者アンケートでは、「考古学についてたくさんのが学べてよかったです」「夏休みにぴったりの企画で、親子共々楽しくできました」など、うれしいお言葉をたくさんいただきました。今後も、多くの子供たちが考古学に慣れ親しんでもらえるような活動の企画・運営に努めていきたいと思っています。

(松嶋 隆徳)